



研究室訪問



都市を考へることは、時代を考へること
光と影のコントラストに目を向け
社会と人間の問題に迫る

「Global City」は多面的
成熟へ向かうプロセスに注目

ニューヨークやロンドン、パリといった都市は、「Global City（世界都市）」と表現されることがあります。この「Global City」という言葉には、実は二つの意味があるのです。一つは、「世界の経済・文化の中心にある都市」ということ、もう一つは、「都市自体が世界である」の意、つまり世界そのものの縮図のように、豊かさと貧しさや多様な文化が共存した都市ということです。東京ももちろんいまや「Global City」の一つです。80年代から前者の意味の「Global City」を目標として歩みつけ、現在では後者の意味での「Global City」になりつつあるのです。

「Global City」としての東京には、他の欧米都市にない特徴があります。なかでも注目すべきなのは、きわめて短期間に「Global City」化したということです。猛スピードで経済が成長し、ごく短時間のうちに土着の文化の上に欧米的な文化が移植され、独特の折衷文化が開花したのです。その一方で、外国人住民への差別問題などが象徴しているように、根底に

社会学研究科教授 町村敬志

1956年北海道生まれ。79年東京大学文学部卒。82年同大社会学研究科修士課程了。

東大助手、筑波大講師を経て、91年一橋大学社会学部助教授。93年、カリフォルニア大学ロサンゼルス校客員研究員、99年一橋大学社会学部教授。社会学、都市研究、エスニシティ研究が主な研究領域で、自治体や国に提言を行っている。「もともと旅行好きで、いろんなものがごちゃまぜの都市に興味をもっていた。街歩きが日課だった80年代、東京がみるみる変化していくのを目の当たりにし、その不思議な舞台裏そしてグローバルな背景に興味を引かれて、ここまでできました。」



はなお閉鎖性が潜んでいることも見逃すことはできません。

都市は人の一生と同じで、生まれ、成長し、どこかでピークを迎え、ゆるやかに成熟へと推移していきます。高度成長という時代の後押しを受け、類をみないほど急速に成長した「Global City」東京はいま、成熟した社会へと移行する段階を迎えています。ロンドンやパリが、長い時間をかけてたどってきた成熟化が、東京ではどのようになされていくのか、现阶段では未知数といえます。欧米の都市のたどってきたプロセスを学び取って歩んでいくのでしょうか、それとも違う道筋をたどるのでしょうか。また、その過程でこれまで追いつもとめられてきた「豊かさ」以外の価値軸を生み出すことができるのでしょうか。生み出すとしたら、それはどのようなものであり得るのでしょうか。社会学的に見て、非常に興味深いテーマであると同時に、日本という社会空間を共有していく私たち一人ひとりが真剣に考えるべき問題の一つだと思います。

テーマもアプローチも、学生が決定 努力をかたちにする過程に発見がある

都市を考えることは、時代を考えることであり、いま生きている社会を考えることです。「Global City」に豊かさ貧しさが混在しているように、繁栄には必ず負の側面があります。その光と影の両方をキチンとみることが大切なのです。さらにいえば、多種多様な人間が集まり、日々生活を営み、産業や経済のダイナミズムが躍動し、多文化が混在する都市は、一つの視点から捉えきれものではありません。それどころか、見る角度や触れる位置によってかたちが変わってしまうのがふつうです。「社会」を見ることは、実は自分と、自分がいつの間にか前提としている暗黙知を発見し直すことを、意味しているのです。

私のゼミでは毎年、3年生がテーマを決め約1年をかけて調査、研究し、レポートを書き上げます。みんなでディスカッションして一つの街を選び、各人の問題意識によって自分

のテーマを決めます。例えば、昨年、報告書が出来上がった「渋谷・新宿」プロジェクトでは、外国人医療、ホームレス、ヤングハローワーク、青山の同潤会アパート、音楽など、非常に多様なテーマが選ばれました。精度の高い研究にするには、例えばどうアプローチするのか、取材やインタビューはどう行うのか、アンケートをするならどんな設問でどう実施するのか、分析はどのように行うのか、等々、学生たちはおそろく初めて経験するさまざまな問題にぶつかります。また、街を歩き回り、汗をかき、壁にぶつかっては知恵を絞るといった、長く、地道な努力も不可欠です。私自身はアドバイスはしますが、ほとんどすべて学生に任せています。自分の目でみたもの・気づいたことを言葉にしていく過程にこそ、さまざまな発見があり、自分が忘れていたものに気づくことができるからです。

世の中の仕組みを変えていく人の 「基礎体力」を鍛える

こうした都市研究は一見、遠回りに見えるかもしれませんが。また、その成果には、研究書や商品価値をもつメディアと同じレベルを要求しますから、学生にとっては厳しい経験ともいえます。しかし、人や街に出会うこと、自分の目で見て考えること、徹底的な議論を闘わせることを通して、多くの人が気づかないことに気づき、物事を複眼的に見ることができるようになり、本当の意味での問題発見／解決力や思考力が養われていくのです。私が学生に望んでいるのは、いますぐ役立つ知識ではなく、5年後、10年後に役立つ学習体力を身につけてほしいということです。知識は時代とともに変化しても、考え抜く力や物事の見方といった本質的なものは変わることがありません。むしろ、30～40代になったときにその人の「器」を大きくしていくと思います。世の中を変えていける人材であるためには、こうした「基礎体力」と「より遠くを見通す視野の広さ」「過去を遡って考えることのできる知的な器」が不可欠なのです。(談)